

エンカウンター (ENCOUNTER)

第 170号

平成28年 6月20日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.gr.jp/>

内村鑑三「続一日一生」より (2)

2月2日

言いつくせない賜物のゆえに、神に感謝する。

(コリント第2書9・15)

我に大いなる歓喜 (よろこび) あり。世はこれをわれより奪うあたわず。われはまた好んでこれを人に分かつあたわず。そは、これ、神がわれに下したまいし特別の恩賜 (たまもの) なればなり。世はもちろん、その何ものたるかを知らず。神より同一の恩賜にあずかりし者のみ、その何ものたるかを知る。これ聖霊 (みたま) の恩賜なり。これにまさりて貴きもの、全宇宙にあるなし。これを賜りて、われらは他に何の求むるものなきに至る。これありて、われは足れり。これを心に受けて、われらはすべての苦痛 (くるしみ) を忘る。この恩賜に接して、われらは、神は全然愛なるを知る。この恵みにあずからんがためには、われらはいかなる困苦(くるしみ)に会うも可なり。

今に至ってわれは初めて知る、天にあるもの、地にあるもの、あるいは高き、あるいは深き、あるいは今あるもの、あるいは後にあるもの、その他何ものも、われらを、わが主イエス・キリストによれる神の愛より離らすことあたわざるを。

2月3日

さて、信仰とは、望んでいる事がらを確認し、まだ見ていない事実を確認することである。(ヘブル書11・1)

冒険の無き人生に興味なく、信仰のなき生涯に意義がない。万事が科学化せられて、何事も計算的に予知せらるるに至って、人生は機械化せられて、生くるの甲斐なきに至る。そして生命が生命である間は、その科学化は永久におこなわれぬ。信仰は生命の必然的付随物である。生命そのものが大なる冒険である。死せる物質界にありて存在を維持せんとするのである。この宇宙に生まれ出でし以上、冒険はまぬかるべからず。信仰は廃すべからず。

2月4日

すると、あなたがたに聖霊を給い、力あるわざをあなたがたの間でなされたのは、律法を行なったからか、それとも、聞いて信じたからか。(ガラテヤ書3・5)

宗教に2種ある。ただ2種あるのみである。すなわ自力宗と他力宗と、これである。儒教、神道、回教、ユダヤ教、みな自力宗である。そうして浄土門の仏教は他力宗であるが、絶対他力宗でない。信仰を救いの条件として要求する宗教は、いまだ絶対他力宗と称することはできない。信仰そのものまでを神のたまものとして見るに至って、宗教は絶対的他力宗となるのである。そうしてキリストの福音はかかる宗教である。すなわち絶対的他力宗である。いわく、「なんじらの信ずるは、神の大能の感動によるなり」(エペソ書1・19)と。信者の信仰そのものが神のたまものである。ゆえに誇るの余地が寸毫(すんごう)ないのである。ただ祈るのである。祈り求むるのである。そうして、その祈る心をさえ祈り求めて、これを与えられて、神に感謝するのである。造られし人は、造りし神に対して、絶対的服従に出ずるより他に、取るべき態度はないのである。信仰の道はつまるところ、祈り求むるの道にほかならないのである。

2月8日

その時、正しい者たちは答えて言うであろう、「主よ、いつ、わたしたちは、あなたが空腹であるのを見て食物をめぐみ、かわいているのを見て飲ませましたか。いつあなたが旅人であるのを見て宿を貸し、裸なのを見て着せましたか。また、いつあなたが病気をし、獄にいるのを見て、あなたのところに参りましたか」。すると、王は答えて言うであろう、「あなたがたによく言うておく。わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者の一人にしたのは、すなわち、私にしたのである」。(マタイ伝 25・37-40)

いかに心強きことよ。われらが主の名によりてなす、すべての小なる善行は、多くの場合に認められず、時には突き返さるることありといえども、しかもむなしからず、無用成らず、無効ならず、宇宙の大御心の記憶に存し、受納せられ、嘉賞せられ、そして、ある時、ある所において、ある形をもって報いらるというのである。実に神の宇宙は大銀行であって、これに預けし善行は決して失われず、一方において失われしがごとく見えしものは、他方より帰り来る。しかも元のままにて帰り来たるにあらず、聖手(みて)にゆだねまつりし信仰の量に従いて、利息を付せられて帰り来る。されば「われら善をおこのうて倦(う)むべからず。そは、若し、たゆむことなくば、時に至りて必ず刈り取るべればなり」(ガラテヤ書 6・9)

2月10日

あなたは彼らを恐れてはならない。あなたの神、主である大いなる恐るべき神があなたのうちにおられるからである。あなたの神、主はこれらの国民を徐々にあなたの前から追い払われるであろう。あなたはすみやかに彼らを滅ぼしつくしてはならない。そうでなければ、野の獣が増してあなたを害するであろう。しかしあなたの神、主は彼らをあなたに渡し、大いなる混乱におとし入れて、ついに滅ぼされるであろう。(申命記7・11—23)

遅鈍なるべし。事をなすに、十分に時を取るべし。小事をもって満足すべし。ただ善くなさんことを努むべし。「信ずる者は急がざるべし」(イザヤ書28・16)と聖書は言う。神はその聖子をもって、われらがなすべきことを、われらに代わりてなしたもうた。今や残るは、われらが此処彼処(ここかしこ)において、その苦しみの欠けたるところを補うことのみである(コロサイ書1・24参照)クリスチャンは全能なる神の紳士(あるいは淑女)なりと言う。しかも常に急ぎつつあるものは紳士にあらず。救いはすでにわれらのために完成せられた。目的物は既に獲られた。永世はわれらの前に横たわる。神は我らと共に働き、われらは神と共に働きつつある。快いかな、快いかな。

2月14日

だから、わたしはキリストのためならば、弱さと、侮辱と、危機と、迫害と、行き詰まりとに甘んじよう。なぜなら、わたしが弱い時にこそ、私は強いからである。(コリント第2書12・10)

私どもの生涯にも多くの苦難(くるしみ)と悲哀(かなしみ)とがあります。私どもが臨んで欲しくない事が臨み、臨んで欲しいことが臨みません。私どもの祈祷の多分は、充たされない祈祷(ねがい)として消えてしまいます。その事を思う時に、神の存在が疑われ、私どもは何ゆえに基督信者に成ったのであるか、その理由を知るに迷います。しかしながら聖書は明らかに私どもに示します。神の聖意さえ成れば、それでよいのであります。私どもが世につかわされたのは、幸福を楽しまんためではありません。神の大なる事業に参加せんためであります。そしてそのためには幸、不幸は選ぶところではありません。もし死がそのために必要でありますならば、「アアメン、主を賛美せよ」であります。不幸、患難、辞するに及びません。しかし、最大の幸福、最大の恩恵は、自分のために何の求むるところなくして、ただ神の聖意の成らんことをのみこれ願うその心であります。

2月15日

あなた方は神の宮であって、神の御霊が自分のうちに宿っていることを知らないのか。もし人が、神の宮を破壊するなら、神はその人を滅ぼすであろう。なぜなら、神の宮は聖なるものであり、そして、あなたがたはその宮なのだからである。(コリント第1書3・16-17)

いかにして聖霊を受けんか。これ問題である。密室の熱烈なる祈り、一人山中に分け入りて谷川の調べと鳥の歌に合わせてささげらるる静かなる祈り、それも貴くもあり、また必要でもある。しかしこれのみにては聖霊の恩賜にあずかることはできない。これのみに訴うるははなはだ不十分である。神の霊は「神の宮」に下る。集会の上に、油と露と炎とは下る。そしてこれが会衆の上に分かれてくだるのである。過去において、聖霊はおおむねかくのごとくにしてくださった。ゆえに今においてもしかり。また将来においてもしかりであろう。集会の必要、祈祷会の必要、共に福音を学び共に祈るの必要は、ここにおいてか起こるのである。孤立は大なるわざわいである。聖霊の下賜を妨ぐることである。われらは相つらなり相結びて、全体において一つの「神の宮」を形造り、この宮の上に一つとして下る聖霊を各自が分与せらるるよう努めねばならぬ。

2月16日

あなたがたが救われたのは、実に、恵みにより、信仰によるのである。それは、あなたがた自身から出たものではなく、神の賜物である。決して行いによるものではない。それは、だれもが誇ることがないためである。わたしたちは神の作品であって、良い行いをするように、キリスト・イエスにあって造られたのである。神は、わたしたちが、よい行いをして日を過ごすようにと、あらかじめ備えて下さったのである。(エペソ書2・8-10)

キリスト教の修養！これ座禅でもなければ読書でもありません。

キリスト教の修養は、祈祷をもって神と交わることであります。聖書において神の聖旨を探ることでもあります。そうしてそのあとは畑において、職工場において、または帳場において、神より賜りし能力(ちから)を実行することでもあります。何と常識にかのうたる、また、何と有益なる修養法ではありませんか。

2月19日

神は、神を愛する者たち、すなわち、ご計画に従って召された者たちと共に働いて、万事を益となるようにして下さることを、わたしたちは知っている。(ローマ書8・28)

宇宙はその細目に至るまで、神の支配したまうところのものであります。神の許しなくしては、一羽のすずめすら地に落ちません。また私どもの頭の毛までがみな数えられるとのことでもあります。かかる世にありて、かかる神を信ずることでありますれば、私どもは何事にかかわらず安心しておるべきであります。私どもの兄弟が私どもに逆らって私どもを苦しめましようが、私どもの友が私どもを売って私どもを死地におとしいれましようが、わたしどもの事業に大妨害が起こりましようが、これみな愛なる天の父の主宰の下に成ることでありますれば、私どもに益をなすことであって、決して害をなすことでないに相違ありません。「万事(すべてのこと)は、神の旨によりて召(まね)かれたる神を愛する者のために、ことごとく働きて益をなす」とは、実に慰謝をもって充たされたる言辭(ことば)であります。

2月23日

小事に忠実な人は、大事にも忠実である。そして小事に不忠実な人は大事にも不忠実である。だから、もしあなた方が不正の富について忠実でなかったら、誰が真の富を任せるだろうか。また、もしほかの人のものについて忠実でなかったら、だれがあなたがたのものを与えてくれようか。(ルカ伝 16・10-12)

偉人とは大事をなす人であると思うは大なるまちがいである。偉人とは小事に忠実なる人である。小事に忠実なるがゆえに、その小事が積もりて、彼をして大ならしむるのである。小人他なし、虚偽(いつわり)の人である。万事をごまかす人である。何事をも完全になさんと欲してその事を努めざる人である。ゆえに彼は生涯を費やして一事をも成就し得ないのである。

偉人たらんと欲するか? はなはだ容易である。すべて汝の手に来ることは、力を尽くしてこれをなすべしである(伝道の書 9・10)。誠実そのことが偉大である。誠実をもって万事に当たりて、何人も偉大たらざらんと欲するも得ない。世にいまだかつて誠実ならずして偉大なりし人のあったことはない。

2月25日

そこで、イエスは、神のみまえにあわれみ深い忠実な大祭司となって、民の罪をあがなうために、あらゆる点において兄弟たちと同じようにならねばならなかった。主ご自身、試練を受け苦しまれたからこそ、試練の中にある者たちを助けることができるのである。(ヘブル書2・17-18)

祭司、世に貴むべき職にしてこれにまさるものはない。これまことに聖職である。唯一の聖職である。神を人に紹介し、人を神につれ行くの職、これまことに慕うべく懇求(もと)むべき職である。

人はすべて、神が彼を置きたまいしその地位にありて、善き祭司となることができる。まずナザレのイエスに教えられ、神の心の何たるかを知り、その、愛であって、恐怖でないことを知り、その、おのがひとり子をさえ惜しまずして与えたまう程に、人を愛したまうを知り、同時に、また自己(おのれ)を知り、おのが罪を知り、これを除くの道を知り、悲痛(かなしみ)を知り、艱難(なやみ)を知り、これによりて同情を知り、慰謝の術を知り、平和獲得の秘訣を知りて、われらの何人も、神と人との間に立ちて、神を人に紹介し、人を神に導きて、祭司の聖職を果たすことができる。これまことに人として最もふさわしき職(わざ)である。

2月27日

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって、神があなた方に求めておられることである。(テサロニケ第1書5・16-18)

喜べよ。感謝せよ。しかしてさらに大なる恩恵を仰げよ。感謝は有効なる祈禱の要素なり。神は感謝なき祈禱にその耳を傾けたまわず。「それ持てる者は与えられてなお余りあり。持たぬ者はその持てるものをも奪わるるなり」(マタイ伝13・12)。感謝は、「持てる」を証明す。感謝する者は、恩恵の上にさらに恩恵を加えらるべし。我らは聖父(ちち)の前に貧困を訴えて彼の憐憫を乞わんと欲すべからず。むしろ富有を述べて、恩恵の加増にあずからんと欲すべし。